

## 1 アブラムシ類

### A 生態と防除のねらい

- 1 ニセダイコンアブラムシ、モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシの3種が寄生する。
- 2 ニセダイコンアブラムシは、夏から秋にかけて多く発生する。黄緑色で薄い白粉を背面に帯びている。ダイコン、ハクサイ、カブなどに寄生が多く、キャベツでは比較的少ない。
- 3 モモアカアブラムシは、有翅虫の飛来は4月頃から認められる。春季のピークは4月下旬～5月中旬で6月上旬以降減少なくなり、9月下旬以降再び増加する。寄生はアブラナ科、ナス科野菜など200種に及ぶ。
- 4 ダイコンアブラムシは、春から初夏にかけて多くなる。黄緑色で白粉で覆われ白く見える。キャベツでの発生が多く、ダイコン、ハクサイでは少ない。
- 5 ダイコン等ではウイルス病予防のため、発生初期からの防除に努める。

### B 耕種的防除法等

- 1 プラスチックシルバーフィルム等などのマルチにより有翅虫の飛来を防ぐ。
- 2 障壁作物によって有翅虫の飛来を防ぐ。

## 2 コナガ

### A 生態と防除のねらい

- 1 年間の発生回数が多く、温度が8℃以上あれば発育を続ける。一般に春と秋の発生が目立ち、被害も著しい。
- 2 幼虫、蛹などの各ステージが混在すると1回のみでの防除では効果が劣るため、7～14日間隔で数回実施する。作型が混在する地域では特に発生が多く薬剤抵抗性がつきやすくなる。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項

- 1 同一系薬剤を連用すると、薬剤感受性が低下するので、系統の異なった薬剤を組み合わせ、ローテーション散布を実施する。
- 2 ジアミド系薬剤（IRACコード：29）の感受性が低下しているため、年1回の使用とする。

## 3 ハイマダラノメイガ（ダイコンシンクイムシ）

### A 生態と防除のねらい

- 1 幼虫態で越冬し、成虫は4～5月に現れ、年に数世代繰り返す。
- 2 被害は夏から初秋にかけて播種するダイコン、ハクサイに多く、特に高温乾燥の年に被害が著しい。
- 3 生育初期に加害を受けると被害が著しいので、防除は本葉の出始め頃に1回とその後1週間おき1～2回実施する。

### B 耕種的防除法等

- 1 8月まきのダイコンでは、できるだけ早まきを避ける。
- 2 障壁作物の間作で成虫の飛来を防ぐ。

## 4 ネキリムシ類 (カブラヤガ、タマナヤガ)

### A 生態と防除のねらい

- 1 幼虫態で越冬し、成虫は4～5月に現れ、年に数世代繰り返す。
- 2 被害は夏から初秋にかけては種するダイコン、ハクサイに多く、特に高温乾燥の年に被害が著しい。
- 3 生育初期に加害を受けると被害が著しいので、防除は本葉の出始め頃に1回とその後1週間おき1～2回実施する。

### B 耕種的防除法等

8月まきのダイコンでは、できるだけ早まきを避ける。

## 5 ヨトウガ (ヨトウムシ)

### A 生態と防除のねらい

- 1 ハクサイ、キャベツ、レタス、バレイショなど多くの野菜を加害する。
- 2 第1回成虫は4月上旬～5月中旬、第2回成虫は9月上旬～10月上旬に現れ、産卵する。加害は秋季に著しい。
- 3 防除は、若齢幼虫が集団となっている食害初期をねらって薬剤散布するのが最も効果的である。

### B 耕種的防除法等

ほ場の周辺に遮断溝を作るか、ほ場周辺をビニールや塩ビ板で囲うことで幼虫の侵入を防ぐ。

## 6 ハスモンヨトウ

### A 生態と防除のねらい

- 1 ハクサイ、キャベツ、レタス、エンドウ、バレイショ、サトイモなど多くの野菜を加害する。
- 2 若齢幼虫は集団で加害し、葉は白くかすり状になる。
- 3 被害は8月～10月にかけて大きいので、ほ場を見回り、幼虫が分散する前の若齢幼虫期に薬剤散布を行う。
- 4 夏季が高温乾燥に経過する年には、秋に大発生することがあるので、指標作物としてサトイモなどの被害状況を観察し、早期防除に努める。
- 5 病害虫防除所のホームページ (<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>) に掲載される情報 (トラップデータ等) に留意して適期防除に努める。

### B 耕種的防除法等

ほ場の周辺に遮断溝を作るか、ほ場周辺をビニールや塩ビ板で囲うことで幼虫の侵入を防ぐ。

## 7 モンシロチョウ (アオムシ)

### A 生態と防除のねらい

- 1 年6～7回発生し、1年を通して幼虫の被害が認められる。
- 2 ふ化幼虫の食害は少ないが、齢期が進んだ幼虫は葉脈を残して葉を食べつくすことがある。
- 3 防除は、若齢期を対象に実施する。

## 8 キスジノミハムシ

### A 生態と防除のねらい

- 1 年3～5回の発生で、成虫が草の根元や土壌の間隙で越冬する。
- 2 成虫は葉を食害し、幼虫は土壌中で、ダイコン、カブ、ハクサイの根部を食害する。このため、発芽後の生育が悪く、根の加害は商品価値を落とす。
- 3 防除はは種20～30日までが重要であり、幼虫加害を防ぐための粒剤の施用と飛来成虫の産卵防止のための茎葉散布を併用すれば防除効果が高い。
- 4 アブラナ科野菜の連作や暖冬及び6～7月に雨が少なくと多発する傾向にあるので、注意する。

### B 耕種的防除法等

- 1 アブラナ科野菜の連作を避ける。
- 2 雑草の根元、収穫残さの葉の間などで越冬するのでほ場周辺を清潔にしておく。
- 3 0.8mm目以下の被覆資材で覆うと被害を回避できる。

## 9 オオタバコガ

### A 生態と防除のねらい

- 1 本種は、6月から増え始め、年4～5回発生する。発生量は9～10月に最も多くなる。
- 2 成虫は点々と産卵するため、株当たりの幼虫数は1～数頭と少ない。しかし、幼虫は結球部に潜り、食害するので被害が大きい。
- 3 幼虫の体表面には粗い毛が肉眼で確認でき、ヨトウガ、ハスモンヨトウの幼虫と区別できる。
- 4 株当たりの幼虫数が少ないため、初期の被害を見つけるのは困難である。フェロモントラップなどを用いて成虫の発生時期、量の把握に努める。
- 5 病害虫防除所のホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>) に掲載される情報（トラップデータ等）に留意して適期防除に努める。
- 6 幼虫は、結球部に潜り食害するため、薬剤の効力があがりにくい。結球が早い品種では、防除時期に注意を要する。

### B 耕種的防除法等

被害株は次世代の発生源となるので、ほ場外に持ち出し、処分する。

## 10 ナメクジ類

### A 生態と防除のねらい

- 1 雑食性で成貝、幼貝ともに葉を食害する。また、結球株の株元近くに潜り込むので商品価値を損ねる。葉が不整形に食害された株では光沢のある粘液の這い跡が見られる。
- 2 夜行性であるが、降雨時や雨上がりの時には昼間でも食害するのが見られる。明け方や夕方にも活動するので、このような時に発生の確認を行う。
- 3 湿気の多いほ場で発生が多く、常発地では被害が大きい。また、畦畔近くの株や周辺に雑草地があるほ場では発生が多くなる。
- 4 作物や有機物の残さは、生息場所や産卵場所となる。

### B 耕種的防除法等

- 1 ほ場の排水を良くする。
- 2 ほ場周辺の雑草や作物残さを除去し、生息や産卵をなくす。

## 11 カタツムリ類（ウスカワマイマイ）

### A 生態と防除のねらい

- 1 雨の多い時期に発生加害し、各種野菜の葉を食害する。また、越冬した成貝や幼貝は4～5月頃から活動を始め、日中は根際や地中浅くかくれ、夜間に現れて食害する。
- 2 酸性土壌（pH 5以下）や湿潤な場所に発生し易く、特に梅雨期に警戒する必要がある。
- 3 防除は常発地ではほ場環境の改善が主体であり、多発した場合に薬剤を使用する。

### B 耕種的防除法等

- 1 ほ場の排水をよくし、作物残さ、雑草の除去及び土壌酸度の矯正を行う。
- 2 小面積では捕殺する。